【276】

氏　名（本籍）	藤（ふじ）　桂（けい）（石 川 県）
学 位 の 種 類	博　　士（心 理 学）
学 位 記 番 号	博　甲　第　5427　号
学位授与年月日	平成 22 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科
学 位 論 文 題 目	**インターネット利用が社会性および攻撃性に及ぼす影響** －インターネット行動尺度による分析を通して－

主　査	筑波大学教授	博士（心理学）	吉　田　富二雄
副　査	筑波大学教授	文学博士	松　井　　豊
副　査	筑波大学教授	博士（心理学）	藤　生　英　行
副　査	筑波大学准教授	博士（心理学）	湯　川　進太郎

論 文 の 内 容 の 要 旨

インターネット（以降、ネットと略記）の普及とともに、ネット利用が現実生活の社会性や攻撃性に及ぼす影響に関して多くの検討がなされてきた。しかし従来の研究は、利用時間や利用頻度という量的側面のみに基づいてネットの影響を検討するものがほとんどであった。そのため、社会性・攻撃性に影響を及ぼすまでの詳細なプロセスについては、未だに明らかにされていない。本論文は、ネット上での行動の具体的内容（内容的側面）に焦点を当て、また「社会との関わり方→ネット上での行動→現実生活への影響」というモデルを想定して、5 つの調査研究により、ネットの影響過程を実証的に明らかにしたものである。

本論文の構成は、問題提起、実証的研究、総合的考察の三部から構成される。以下にその概略を述べる。

第Ⅰ部：問題提起

第 1 章および第 2 章では、ネット利用の影響に関する先行研究を概観し、ネガティブ影響・ポジティブ影響の観点から整理した。続く第 3 章では、先行研究の知見の不一致を整理するモデルとして、Kraut *et al.*（2002）の Rich get richer Model を取り上げ、先行研究の問題点を論じた。最後に第 4 章では、Young *et al.*（2000）の ACE Model に基づいてネット上での行動内容を検討し、さらに Kraut *et al.*（2002）のモデルにより影響過程を分析するという、本研究の目的を明らかにした。

第Ⅱ部：実証的研究

第 5 章･第 6 章では第一に、ネット上での行動内容を「自己の表出」「他者との関係」「現実とのバランス」という三つの枠組みから捉え、それらを測定する項目を作成した。第二に、(1) ウェブログ上では自己客観視が、オンラインゲーム上では所属感獲得が社会性を向上させること、(2) いずれのツールでも、現実生活での居場所の無さが、没入的関与や依存的関与を介して社会性を低下させ、攻撃的言動を介して攻撃性を増大させることを示した。

第 7 章では、ウェブログにおける「自己の表出」に焦点を当て、行動内容および影響過程をより詳細に検討した。その結果ウェブログとは、様々な自己表現を通して「自己に対する客観視」を深めていくツールであると同時に、他者への「誹謗中傷の極端化」によって攻撃性を増大させるツールであることを示した。また、現実生活における社会との関わり方（対人関係、対人的欲求）は、ウェブログ利用を経て、さらに増幅･

極端化されることも示された。

第8章・第9章では、オンラインゲームにおける「他者との関係」「現実とのバランス」に焦点を当て、より詳細に検討した。その結果、オンラインゲームとは、「社会的スキルの学習」や「現実生活からの休息・解放」の場として機能する一方で、「現実そのものからの逃避」の場として機能し得る、両極的な特徴を持つツールであることが示唆された。また第7章と同様、現実生活のストレス状況や対人的志向性は、オンラインゲームの利用を経て、さらに増幅・極端化されることも明らかとなった。

第10章では、悩み相談掲示板に焦点を当てた。掲示板利用者が、問題・悩みの解決に役立つ体験知・アドバイスを共有したり、怒り・不満を発散したりすることで、問題に直面する姿勢や、問題解決の具体的な行動が促されることが示された。

第Ⅲ部：総合的考察

第11章では、実証的研究の結果を総括し、各ツールの特徴を踏まえながら、ネット上での行動内容を整理した。また、現実生活の社会性や攻撃性に影響を及ぼす過程を整理し、いずれのツールでも、インターネットが、利用者の特性・欲求・状況を、増幅・極端化していく方向で影響していることを確認した。最後に、今後の課題をまとめた。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、インターネットが社会性や攻撃性に影響を及ぼす過程を、ネット上での行動内容の詳細な分析を通して検討したものである。インターネットに関する従来の研究の多くが利用時間や利用頻度という量的側面のみを取り上げてきたことに対して、このアプローチは一歩踏み込んだものとして高く評価される。このアプローチにより、インターネットが、現実生活における個人の特性・欲求・状況をより増幅・極端化していく方向で影響することを、実証的に示すことができた点も同様に評価できよう。方法論的には、オープン型およびクローズ型ウェブ調査という新たな手法を試みている点が注目される。また、ウェブログ、オンラインゲーム、悩み相談掲示板と様々なツールに焦点を当て、各々の特徴や独自の影響過程を明らかにしている点も、評価に値する。今後、行動内容および影響過程の測定に一層の改善が望まれるが、本論文で明らかにされたインターネットに関する知見は、教育的・臨床的応用を考えるにあたり、大きな社会的意義を持つといえる。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。